

書 評

志村真幸『南方熊楠のロンドン
——国際学術雑誌と近代科学の進歩』
(慶應義塾大学出版会、2020年)

石橋 悠人



本書は南方熊楠が英文誌へ寄せた論考を題材に、19世紀末から20世紀前半の英語圏の学術界におけるその業績の意義と影響を検証する。熊楠は『ネイチャー』に51編、『ノーツ・アンド・クエリーズ』（以下『N&Q』）に324編の論考を発表した。膨大な蓄積を誇る熊楠研究の中でも、英語論文に焦点を当てる研究は手薄であるという。著者は各論文の内容や典拠を掘り下げて分析する内在的な思想史ではなく、多数の英語論文を全体的に考察し、熊楠と英語圏の学術・出版文化の関係を社会史的に検討することに力点を置く。これにより、本書は熊楠研究の深化に寄与するだけでなく、ヴィクトリア朝の豊かな知的世界を鮮やかに描き出すことに成功している。

まず各章の内容を確認しよう。第1部は主に『ネイチャー』、第2部は『N&Q』への投稿論文を扱う。第1章では、1890年代前半に熊楠が渡英した経緯が整理され、大英博物館での調査の内実や和漢の書籍を駆使して様々な情報を提供したことが解説される。同時期から英文誌への投稿が始まるが、つづく第2章と第3章は『ネイチャー』にデビュー作「東洋の星座」が掲載された要因を問う。ここでは誌面構成の綿密な解析により、熊楠が利用した読者投稿欄に、高名な科学者による専門論文が少なからず含まれていた事実が解明される。従来の研究では、読者投稿欄であることを理由に熊楠の成果を低く見積もる議論もあったというが、著者はそのような理解を退ける。ただし、「東洋の星座」の知見は必ずしも目新しいものではなく、インパクトも限られていた。

それではなぜ掲載されたのか。著者はこの論考が他の論文への応答であったことで掲載されやすかったと指摘したうえで、同誌の編集長・天文

学者ロッキヤーが関心を寄せる古天文学についての記事であったため、歓迎された可能性が高いとする。この主張を補強するように、誌面や投稿者の属性の丁寧な分析によって、『ネイチャー』に啓蒙的な論考が多く、投稿者には多数のアマチュア学者が見られることが示され、「東洋の星座」が「プロ」による「オリジナル」な論考でなくとも掲載された、とする説得力の高い解釈が導かれる。本書全体の中でも、最も刺激的な考察が展開されていると感じられる。

第4章から第6章では、熊楠が「東洋の星座」につづいて『ネイチャー』に発表した諸論文が検討される。熊楠は漢籍や和書に依拠して東洋の科学史や俗信を論じたが、同誌では日本・インド・中国関連の論考はそれほど珍しくなく、他の日本人研究者による投稿もあった。そうだとすれば、熊楠の独自性はどこに見出せるのか。熊楠は東洋研究から世界的な比較学に次第に軸足を移し、有名なマンドレイク論文をはじめ、神話や説話学を中心に東西の多様な情報を調査して、「学術論文」に近い論考を発表していく。著者によれば、この世界的な比較研究こそが熊楠の独創的な部分であり、高く評価すべき点であるという。しかし、1910年代に入ると食人に関する論文がリジェクトされるなど、投稿論文の不掲載が相次いだ。なぜ「戦略的に」論文投稿を行ってきた熊楠が、やや「時代遅れ」となったテーマである食人を選んで「長すぎる」論文を投稿したのか疑問も残るが、いずれにせよこの頃を境に彼は『ネイチャー』から撤退する。

『ネイチャー』に代わり、帰国後の熊楠が発表の場として選んだのが、第2部の主題である『N&Q』である。まず第7章と第8章では、なぜ熊楠がこの雑誌に適合的であったのかを究明する。著者によれば、理由は大きく二つ。一つ目は『N & Q』が質疑応答を基本型とし、今日的な学術論文が掲載される学会誌ではなく、読者たちの情報交換を主たる目的とした媒体であったことによる。二つ目は民俗、歴史、説話、言語、生物などの領域の記事が多く、熊楠の関心に直結していた点である。熊楠は日本や東洋に関する質問を誌面で受け、それに回答する論考を繰り返し投稿していく。雑誌のメディア空間に、質疑応答を軸にした学者たちのネットワークが形成されていたことが明らかにされる。熊楠はここに活躍の場を見出したのである。

第9章から第12章では、『N & Q』において確認された学者たちのネットワークの成立が、この雑誌のみに閉じられた現象ではなく、世紀末のイギリスおよびヨーロッパの知的世界の重要な層をなしていたことが論じられる。ここで本書は同時代に隆盛した事典編纂へ議論の射程を拡大し、『N & Q』を切り口に、『オクスフォード英語大辞典』『エンサイクロペディア・ブリタニカ』『イギリス人名事典』の編集方法を検討する。これらの事典編纂では無名のアマチュア学者たちが記事執筆を精力的に担った。『N & Q』のスタイルとの類似性や同誌が事典編纂のための情報交換に利用されたことも解明される。著者はさらに視野を広くとり、国内外で『N & Q』と同じ性格の雑誌が存在していた事実に着目する。例えば、第10章で扱われるオランダの『フラヘン・エン・メデデーリンゲン』に熊楠は論文1編を寄稿しているが、この他にも類似雑誌が量的に分析されることで、アマチュア学者たちが活躍する独特な世界の広がりが見えてくる。以上が本書の概略である。

著者は多数の英語論文や学術誌の誌面の丹念な調査から、バランスのとれた熊楠の評価を提起する。例えば、『ネイチャー』の読者投稿欄は先端科学に関する議論の場であり、熊楠がそこに論文を戦略的に発表したと主張することで、従来の研究とは異なる視点を打ち出している。一方、熊楠が独自性のある論考を発表できたのは特定の話題のみであり、それ以外では他の著作に依拠した情報提供にとどまることも多かったとする。大量の論文を残したが、多くは他の論文や読者投稿への応答であり、質が担保されていない場合もあった。日本からの投稿や東洋を対象とする論文も、専売特許とは言えない。それでも、著者は東西比較研究において熊楠は十全な個性を発揮したと高く評価する。熊楠の業績を手放しに称賛するのではなく、あるいは学術的な価値がないものと切り捨てるのでもなく、同時代の知の状況を強く意識しながら適切に位置づける努力が払われている点が、本書の大きな特徴と言える。

本書は投稿欄と質疑応答形式が、熊楠にとってきわめて適格的であったことを教えてくれる。ここで評者が指摘したいのは、このような発見を踏まえると、科学雑誌の形式自体が、学者の側の研究・実践・思考を規定する要素となりえるという新たな視角が浮上してくる点である。一般的に学

術研究は、調査→論文執筆→雑誌への投稿という手続きをとる。しかし、熊楠の事例が示唆するのは、学術誌の性格・読者・誌面の形式が、研究者の実践や調査方法、執筆スタイルに無視できない影響を及ぼしていることである。学術誌は最終的な成果発表の場としての役割だけではなく、むしろ研究の中身や方法を左右する、積極的な意味と機能を持つ媒体と捉える必要があるのではないか。このような視座の導入により、学術誌と研究者の相互作用をさらに深く分析する展望が開かれるであろう。

また、近代西洋における科学の制度化や科学知識が社会に定着する過程で、学術誌の普及が果たした重要な役割はよく知られている。19世紀以降に定期刊行物の種類や部数は爆発的に増加したが、科学・技術・医学関連の雑誌でも同じ傾向がみられる。近年の英語圏の科学史研究では、このように増加した新聞や雑誌などのメディアにおける科学の表象や知識の伝播が、ますます大きな関心を集める対象となっている。しかし、この時代の西洋諸国における科学誌の意義を本格的に検討する日本の研究は意外にも少ない。したがって、この不足を埋めることを試みる本書は、西洋近現代の科学史における出版物の役割や書物・読書の歴史研究としても大いに参照に値する。

終章において著者は19世紀後半の学術誌の世界が、科学の門戸を国籍、階級、性別とは関係なく大きく開放したと強調する。確かにアマチュア層や大衆向けの科学誌が、知識へのアクセスの間口を広げたことは疑いえない。ただし、学術誌の文化は「開放性」のみを特徴としていたわけではない点にも留意が必要であろう。『N & Q』について雑誌世界の開放性を認める把握は妥当性が高いと思われるが、一方の『ネイチャー』に関してこの解釈がそのまま適応できるか疑問が残る。『ネイチャー』に関する近年の研究では、19世紀末に専門性が大きく上昇し、素人はおろか、学者であっても論考の内容を正確にフォローできないケースが増加したことが指摘されている。知識へのアクセスの「開放性」と同居するように「閉鎖性」が高まり、そこから「排除」されてしまう人々が生み出されたと考えられる。

『ネイチャー』と『N & Q』のような商業誌と学術・専門団体が発行する学会誌との関係についても立ち入った考察が必要ではないか。19世紀末から20世紀初頭においても、最も先端的な研究成果の多くが、王立協会

やその他の専門団体が発行する「権威的」な学術誌で発表されていた。学会誌・専門誌の動向を視野に収めることで、『ネイチャー』や『N&Q』の位置づけはさらに明確になった可能性が高い。学術誌文化の開放性や水平的な拡大だけではなく、その階層的な構造や知識の権威や正当性をめぐる競合の中で、これらの商業学術誌や熊楠の論考をどのように捉えることができるだろうか。もっとも、評者によるこれらの細かな指摘は、本書の価値を損ねるものでは全くない。本書は熊楠の英語論文と科学誌の世界を丹念に分析した労作であり、ヴィクトリア朝の学術文化に関する画期的なモノグラフであることをあらためて強調しておきたい。

—中央大学教授